

## 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

## うしとら

## 第10号

## ● 目次 ●

理事長就任のご挨拶：益々高まる懇話会の重要性	1
論点：仙台城石垣の調査・保存・復元をめくって	2
Area Report [SIGNAL]：「ヤクーチア」・「ブリヤーチア」・「中国」・「域外の朝鮮学」	3.4
ウラジオストクの歴史学国際会議に出席して	4
最近の共同研究会から	5
モンゴル教育文化相がセンターを来訪	5
日本館便り	6
新任教官紹介	6.7
センター動向	7
広東省民族研究所の概要紹介	7
日口交流協会等主催【日口・シンポジウム】ならびにJCREES主催【市民学会】参加の記	8

## 理事長就任のご挨拶

## 益々高まる懇話会の重要性

東北アジア学術交流懇話会理事長 山田 勝芳  
東北アジア研究センター長



徳田昌則前理事長の後を受け、本年4月より理事長に就任いたしました。なにとぞよろしくお願いいたします。

4月就任以来のご報告と若干の付言をさせていただきたいと思っております。まず4月下旬にロシア連邦・ノボシビルスク州のタラコンスキー知事が、ロシア科学アカデミー・シベリア支部総裁ドブレツォフ氏、同支部無機化学研究所長クズネツォフ氏と来日されることとなり、本センターは訪問・講演の計画・準備を進めました。しかし、今冬の大雪による融雪水害発生とのことで訪日が中止となりました。会員の皆様の中にも期待されておられた方も多くと存じますが、やむをえないことでした。5月21日にはモンゴルのツァンジド教育文化科学技術大臣が東北大学東北アジア研究センターを訪問されました。センター教官との交流会、研究室視察、モンゴルからの東北大学留学生との懇談会などが行われました。今回の訪問は、本センターがモンゴル研究で果たしている大きな役割が評価されたためであろうと考えております。

5月26日には、国際協力事業団（JICA）東北支部との共催で、セミナー「一衣帯水の国—中国への協力を考える—」を開催いたしました。日中間の厳しい現状が感じられる真剣な報告・討議がなされ、たいへん有意義なものでした。次に、6月5日から9日までロシア科学アカデミー・シベリア支部やノボシビルスク大学との交流を活性化させるため、本センターのシベリア連絡事務所（日本館）の視察も兼ねて、ノボシビルスク市を訪問いたしました。この訪問には東北大学から北村事務局長・石崎経理部主計課長、さらに文部科学省から赤塚学術機関課課長補佐が加わりました。これによって、日本館への大学・文部科学省のご理解が深められたと共に、厳しいご助言もあるのではないかと考えております。

6月22日には、日口交流協会（大道寺小三郎会長）が主催し、

本センターも後援者の一つに名前を連ねましたシンポジウム「日口歴史認識問題と出版交流」が開催され、日本文学のロシア語翻訳などが議論されました。また23日・24日の両日には東京外国語大学において、本センター客員教授の和田春樹（東京大学名誉教授）実行委員長の下に組織された市民学会「日本とロシア—歴史・交流・共生—」が開催されました。ロシアに関する諸学問分野のみならず、各種交流団体等も多数参加した会で、今後の「ロシア学」「ロシア地域研究」と交流のあり方を考えさせられる意義のあるものでした。

このように、東北大学東北アジア研究センターはロシア・モンゴル・中国などに関わる諸活動を展開しておりますが、いうまでもなくこれらは日常的な学術研究を基礎としたものであります。本センターの教員数は決して多くはありませんが、それぞれの分野で着実な成果をあげるべく励んでおります。しかし、東北アジア地域がハード・ソフト両面のインフラが不十分な地域であるだけに、学術研究だけでは限界があります。この地域に関心をもっておられる多くの方々のご協力なくしてさらなる展開は望めません。この役割を果たしていただいている懇話会の存在意義は、ますます大きくなっていると申せます。また東北アジアに関する多様な正確な情報を会員の皆様にお伝えすることによって、会員の皆様ともども諸活動も活発化するものと考えております。

本センターは今年5月に満5年を迎え、10月1日（月）午後には「記念の会」開催を予定しております。これからは学術研究の進展、各種交流関係の構築等々に一層の努力を求められます。また研究成果や諸活動に対する「評価」も厳しく行われることとなります。「社会」からの「評価」の中には、当然、会員の皆様の厳しいご意見も含まれます。本センターに対する会員の皆様の暖かいご支援・ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

## 論 点

## 仙台城石垣の調査・保存・復元をめぐる

東北大学東北アジア研究センター教授 入間田 宣夫

いまから四百年前に、城下町として出発して、今日の繁栄を迎えているのは、仙台市ばかりではありません。東京・大阪・金沢・甲府・姫路・岡山・福岡・松山など、列島における主要な都市についても、同じことが言えます。東北地方でも、弘前・盛岡・秋田・山形・米沢・会津若松などの主要都市が、その仲間に入っています。

そのような開府四百年の節目を迎えるに当たって、それぞれの都市で、さまざまな記念事業が推進されています。たとえば、城づくりの出発点にまで溯って、石垣・水堀・櫓などに関する調査・復元の作業を進めて、新しい歴史像を市民に提示しようとする事業が、多くの都市によって進められています。それらの調査・復元の取り組みのなかで、当初の石垣が発見されたり、櫓の遺構が発掘されたり、石垣・櫓の復元をめぐる議論が交わされたりしています。

仙台城石垣の調査・保存・復元、ならびに長櫓の調査・復元に関する問題が全国的に注目され、多くの研究者・市民の熱い眼差しが向けられるようになったのは、ほかでもありません、そのような共通の事情によるものでした。

仙台城のばあいには、対象とされる石垣の規模がすば抜けて大きく、しかも現存石垣の裏側から伊達政宗が築いた古い石垣（一期・二期）が発見されたので、ことさらに注目されることになったのでした。しかも、長櫓の復元に関して、調査に

よって確認ができない架空の場所（現存石垣の上）が市長によって選択され、それに対して史実に反するという大きな批判の声が上げられたので、ますます注目の度合いを加えることになったのでした。

それらの調査・保存・復元に関わる取り組みにおいては、仙台市教育委員会による発掘調査が基本的な役割を果たすことになりました。それに関連して、われわれ日本史の研究者も、発掘現場に通い、調査の成果に学ぶと共に、石垣保存のありかた、長櫓復元のありかたに関する見解を取り纏めて、研究者や市民にアピールしたり、仙台市長

に要望書を提出したりする活動を続けてきました。本センターでも、日本史関係の研究者（平川・入間田）が、それに関わってきました。しかし、そればかりではありません。石垣の調査にさいしては、地中レーダー探査の方法によって、石垣の裏込



め構造（階段状石列）や政宗の一期石垣の広がり、発掘以前の地表面から推定されて、調査の指針を提供することになりました。同じく、本センターの佐藤源之教授によるものです。

この秋、9月30日には、仙台に事務局を置く歴史学・考古学関係の七学会によって、「全国石垣シンポジウム」が共同開催される予定です。今後、ますますの進展が望まれます。

## AREA REPORT

## SIGNALL

## ヤクーチアから レナ川の大洪水とサハの人々

今年5月中旬、シベリア東部を流れるレナ川で大洪水が発生した。NHKニュースなどでその被害の状況は報道されたので、お気付きになっている方も多いと思う。レナ川はバイカル湖近くに上流があり、そこから北極海に向かって流れる全長4400kmの川である。このレナ川を中心にして東西にひろがるような形で、ロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）がある。

洪水の被害はサハに集中した。永久凍土に覆われ、日本の8倍の面積をもつこの共和国には、ロシア人以外にサハ人をはじめとする先住民が暮らしている。彼らの自宅をふくむ家屋・建物の3800軒が洪水に流され、8200軒が浸水の被害にあり、被災者は46000人に達した。共和国の人口はおおよそ100万人である。つまり全人口の5%に達するほどの被害なのである。当初レナ川上流のレンスク市を水没させた洪水被害は次第に下流へと広がった。冬期に零下50度に達するこの地域では河は凍結する。雪解けならぬ川解けがすすむにつれて下流の村落、そしてレナ川に合流する大小さまざまな河川に洪水は広がったのだ。

先住民サハの伝統的暦では6月後半の夏至が新年のはじまりにあたり、ウセフというお祭りが開かれる。家族親戚があつまって伝統的料理を食べ、民族舞踊や相撲などスポーツ競技に興じる村単位の祝祭で

ある。一年の大半が厳しい寒さでおおわれるこの地域の人々は夏の到来と天の恵みをウセフを通して祝福するのである。この祭りの開催にも洪水は影響を及ぼした。いくつかの村は、洪水の被害で祭りどころではなく、被害が少なかったところでも祭りの規模を縮小するなどの措置をとっている。

いわば正月休みを返上してまでも、復旧作業をいそぐのはいくつかの理由がある。ほとんどの村人が牛馬を飼っており、7月中旬から8月前半の夏は、家畜の冬用飼料となる草刈りをおこなう時期である。9月には零下の気温に達するサハ共和国では、草刈りの時期は限られており短い期間に集中して行なわなければならない。加えて冬に入って、再び大地が凍結する前に家屋の修理再建をおえなければ当然生死にかかわってくるからである。現在、ロシア連邦政府からの援助の他、隣接する地方自治体、さらに日本をふくめた外国からの援助金・援助物資がとどけられており、復旧作業は急ピッチですすめられている。

追伸：現在、筆者（高倉）は個人的にサハ共和国レナ川洪水被災者援助のための募金活動を行なっています。ご関心のある方は下記にご連絡下さい。資料をお送りします。

（高倉浩樹）

連絡先：シベリア・レナ川洪水被害援助基金2001（代表：高倉浩樹）

電子メール：tabahiro@cneas.tohoku.ac.jp 電話：022-217-7572

## ブリヤート人から 日本にブリヤート人コミュニティ!?

近年ブリヤート共和国の新聞に、日本におけるブリヤート移民に関する記事が掲載された。最初のもは『Бурятия（ブリヤート）』紙の1998年11月21日の記事で、ブリヤートの有名な医学博士E.バザロンへのインタビューである。これまでの外国訪問の中で何が一番印象深かったかの問いに対し、博士は日本旅行を挙げ、戦前にロシアから日本に移住したブリヤート人と出会ったことを懐かしく思い出している。バザロン博士が訪日したのは1978年、仏教学術会議に参加するためであった。博士によると、500戸もあるブリヤート人村が京都付近にあるということである。

最近では『Номер один（ナンバーワン）』という娯楽新聞（2001年2月28日および3月8～14日）で、数千人のブリヤート人が沖縄に住んでいると紹介されている。ロシア革命に続く内戦期、ブリヤ

ート人の中では外国への移住が激増したが、この記事を書いたアクチノフ記者によると、日本のブリヤート移民たちは、チタ市南方のアガ平原から内蒙古のハイラル市、そして沖縄へというルートをとどり、第一陣が沖縄にたどり着いたのは1930～40年代のことだという。この記事では、日本のブリヤート移民の存在は在モスクワ日本大使館も確認済みで、大阪の学術研究機関も調査を行ったことが強調されている。ちなみに現在、ブリヤート人移民の大きなグループが存在するのは、モンゴル国北東部および中国の内蒙古自治区のフルンビル盟である。

これらの記事の内容について検証していくのはなかなか興味深いであろう。

（客員研究員ボロノエヴァ・ダリマ・ツイビコヴァ、訳：伊賀上菜穂）

## 中国から 民族区域自治法の改正

今年2月末に中国の国会に当たる全国人民代表大会の常務委員会で『中華人民共和国民族区域自治法』の改正案が可決された。これは同法が1984年に成立して以来、17年ぶりの改正である。民族区域自治は中国の民族政策の基本をなすものであり、今回の同法改正は、中国政府の民族政策に対する姿勢を示したものであるといえる。

民族区域自治法は、法的基盤の未整備が文化大革命期などにおける民族政策の有名無実化の一因となったことへの反省から制定された。ところがその後中国では改革開放路線が急速に進展し、とりわけ90年代には市場経済が導入されるなど、社会状況が大きく変化した。そのため近年は区域自治法の各条項と実態との乖離が問題となっていた。今回の同法改正によって、これらの矛盾はようやく是正されるに至ったのである。

今回の法改正は、内陸部振興のための一大国家プロジェクトである「西部開発」の本格的始動と無縁ではない。90年代に入って沿海部の漢族地区と内陸部の少数民族地区との間の経済的格差が「東西問題」と呼ばれるほど顕著になっている。図們江開発の例でも見られるように、少数民族地区での辺境貿易・産業振興の推進は漢族資本や労働力の流

入を伴う。また近年では開発による環境破壊も懸念されている。「西部開発」においてもその対処を誤れば、理想とは裏腹にかえって民族間に深刻な対立を引き起こしかねない。従来こうした問題には現地政府が条例で



図們江開発区（延辺朝鮮族自治州）の中国国境税関

個別に対応してきたが、基本法である区域自治法の改正ではこの方面の条項を追加し、少数民族側の権利保証の強化を目指している。ただ今日の中国では少数民族人口の都市部への移住や自治地方以外への拡散も進んでおり、属地主義的な区域自治による少数民族の権利保証の限界や問題点も指摘されている。区域自治法の改正が少数民族地区の諸問題を解決する上でどこまで効果を発揮するかが大いに注目される。

（上野稔弘）

域外の朝鮮学について ▶ 中国で拡大する韓国研究 – 浙江大学韓国研究所から大量の図書寄贈 –

韓中国交回復以来、「韓国研究」という名の下に朝鮮研究が増えてきている。特に最近は教科書問題の解決に向けて、韓国は中国と連携姿勢を強めており、その過程で学術面での協力関係の強化も進めている。例えば、杭州大学をも吸収し、今や中国では北京大学・清華大学についてその質的充実を誇る浙江大学（杭州市）はすでに1994年に韓国研究所を設置し、実績を重ねている。その一部として出されている刊行物を本研究センターに寄贈して下さった。以下に紹介する。

(成澤 勝)

韓国研究 (1)	杭州大学出版社	1994
韓国研究 (2)	杭州大学出版社	1995
韓国研究 第3輯	杭州大学出版社	1996
韓国研究 第4輯	学苑出版社	2000
十至十四世紀中韓関係史料彙編(上)	学苑出版社	1999
高麗と高麗王子	杭州大学出版社	1998
中韓経済発展比較研究	杭州大学出版社	1996
宋麗関係史研究	杭州大学出版社	1997
韓国漢詩選	杭州大学出版社	2000
中韓商法比較研究	杭州大学出版社	1997
中韓人文精神	学苑出版社	1998
韓国独立運動研究	学苑出版社	1999
韓民族文化研究	学苑出版社	2000
韓国伝統文化・歴史巻	学苑出版社	2000
中韓区域経済発展研究	学苑出版社	1999
朴正熙「開発独裁」体制研究	学苑出版社	1999
中韓財政比較研究	学苑出版社	1999
中韓証券市場発展及比較研究	学苑出版社	1998
中国所蔵高麗古錢録	漢語大詞典出版社	1998
中韓教育比較	浙江教育出版社	1997
中韓関係史論集	中国社会科学出版社	1997
退溪哲学思想研究	杭州出版社	1997
中国江南社会と中韓文化交流	杭州出版社	1997
韓国法通論	杭州大学出版社	1996
韓国研究中文文献目録	杭州大学出版社	1994
韓国研究日文献目録	杭州大学出版社	1995
韓国研究西文俄文文献目録	上海訳文出版社	2000

ウラジオストクの歴史学国際会議に出席して

研究機関研究員 伊賀上 菜穂

2001年6月3日から6月10日まで、ロシア科学アカデミー極東支部・極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所の国際会議に出席するため、ロシア連邦ウラジオストク市に滞在した。新潟から飛行機でわずか1時間半で、かつての「閉鎖都市」ウラジオストクに到着する。緯度では札幌と、経度では松江とほぼ同じこの都市は、北京条約でウスリー川東岸が中国領からロシア領になった時、海軍基地として開かれた。「新しい街」というイメージを持っていたが、「村」を飛ばして「街」として建設されたため、丘陵地に建てられた古い商家は19世紀と20世紀の境目の特徴を色濃く残している。街にあふれる中古の日本車のせいか、街が煤けているのが残念である。

研究所の国際会議は歴史研究所創立30周年およびその創設者であるA. I. クルチャーノフ(1921-1991)生誕80年を記念するものであった。その名が示すようにこの研究所は史学だけではなく考古学・民族学も包含している。しかしクルチャーノフが19世紀後半から20世紀初頭の極東史(つまりロシア領極東と初期ソ連領極東の歴史)を専

門としていたため、講演内容もその時代に関するものが多く、考古学やシベリア少数民族に関する発表はほとんどなかった。したがって講演題目は研究所の研究傾向を正確に反映したものではない。だがそこからは、ロシアの中心部から遠く離れ、近隣のアジア諸国との関係に自らの存在意義を見出そうとする極東地域の真剣な姿勢が感じられた。

今回の国際会議は成果発表というよりも記念祝賀会の色合いが強く、2日目の夕方には「海軍将校会館」で大きなパーティーが開かれた。ロシア人のパーティー好きは有名であるが今回のパーティーも日本の懇親会とは較べものにならないほど長く、少なくとも17時から22時まででは続いていた。お決まりのダンスも始まったが、やはりお堅い集まりのせいか最初は参加者が少ない。だが



国際会議の主要参加者。日本・中国からの被招待者と研究所メンバー

しばらくすると若い研究者も学会の重鎮も皆踊り始めた。ロシアのダンスは日本のカラオケと同じで「義務」である。仕方なく私も参加したが、その時できあがった親近感の後日研究協力の話をしたときに役にたった。将来の研究を大きく進める足がかりを与えてくれる渡航となった。

## ● 最近の共同研究会から ●

### ◆公開セミナー「一衣帯水の国：中国への協力を考える」開催

去る平成13年5月26日、国際協力事業団（JICA）東北支部と本センターの共催により、仙台国際センターにおいて「一衣帯水の国：中国への協力を考える」と題して公開セミナーが開催された。基調講演として元上海総領事の蓮見義博氏のご自身の豊富な体験を交えつつ、日中の行動・思考パターンの比較を通じてその違いを興味深く語った。続いて本センターの明日香壽川助教授および渡辺之教授、東北大学国際文化研究科の戸田弘元客員教授、宮城県国際交流協会の阿部澄江囀託員、宮城県立がんセンターの桑原正明院長により、中国の現状および日本の協力に関する発表が行われた。その後会場の参加者を交えたパネルディスカッションが行われたが、会場からは特にODAのあり方の問題を中心に様々な質問や意見が寄せられ、近年の日中間の交流増大とそれに伴う摩擦を反映してか、新たな時代における日中間の協力関係のあり方に対する人々の高い関心を物語るものとなった。



講演する蓮見氏



パネルディスカッションの様子

### ◆新しい共同研究

現在進行中のセンター共同研究は8テーマあり、そのうち平成13年度で終了予定のものが4テーマとなっています。しかし、センターのアクティビティーが増していることもあって、本年度から以下のような新たな共同研究が始められます。既に実質的に始動しておりますが、今年度後半から本格的な展開が予定されています。

今年度新たに始められる共同研究は以下の5つです。

- ・ **ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究**  
一民族誌記述と社会モデル構築のための方法論的・比較論的考察  
研究期間：2001～2002年度  
代表者：高倉浩樹
- ・ **北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究**  
研究期間：2001～2002年度  
代表者：岡 洋樹
- ・ **西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究**  
研究期間：2001～2003年度  
代表者：菊池永祐
- ・ **東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究**  
研究期間：2001～2002年度  
代表者：柳田賢二
- ・ **東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備**  
研究期間：2001年7月～2003年6月  
代表者：宮本和明  
また、次の2つの共同研究は期限を延長して継続いたします。
- ・ **文化のディスプレイと伝統の再編**  
一東北アジア地域における民族観光産業・博物館等の文化的影響力についての研究  
研究期間：1999～2001年度（1999～2000年度から1年延長）  
代表者：瀬川昌久
- ・ **中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火とその歴史効果**  
研究期間：2000～2003年度（2000～2002年度から1年延長）  
代表者：谷口宏充

## モンゴル教育文化相がセンターを来訪

2001年5月21日、モンゴル国教育・文化・科学大臣アユルザナ・ツァンジド（Ayurzana Tsanjid）氏が本学を訪れ、東北アジア研究センターを訪問・見学した。

今回の大臣の訪日は、対モンゴル知的支援関係等招聘事業によって行われたもので、訪日期間は5月16日（水）から23日まで。このうち19日（土）～21日（月）が松島・仙台の旅行にあてられ、21日（月）に東北大学を訪問して、東北アジア研究センターをはじめ未来科学技術共同研究センター、金属材料研究所などを訪問・視察した。大臣には、教育・文化・科学省経済モニタリング・アセスメント局長のプレヴジャヴ・ガンスフ（Purevjav Gansukh）博士が随行し、外務省の職員と通訳が同行した。



歓迎交流会でのツァンジド大臣  
（左から2人目）

東北アジア研究センターではツァンジド大臣を迎えて、歓迎の交流会を行い、センター内の研究室を紹介し、また東北大学に学ぶモンゴル人留学生との懇談会を開催した。

歓迎交流会には、山田勝芳センター



研究室見学

長をはじめモンゴル研究に関心を寄せるセンター教員が出席した。会では、出席者の自己紹介の後、山田センター長が東北大学の概要と東北アジア研究センターの位置づけについて紹介し、さらに「センターのモンゴル研究」の経緯と現状についてモンゴル語と日本語で準備された資料に基づいて説明した。通訳は岡助教授がつとめた。

その後、環境社会経済分野の宮本研究室と資源環境学専攻の佐藤研究室を見学して、研究内容の説明を受けたほか、本学に学ぶモンゴル国の留学生と会見した。

また総長特別補佐小田忠雄教授と会食したが、その際山田センター長をはじめ栗林教授、佐藤教授、岡助教授が同席して歓談した。

（栗林 均）

# 日本館便り

nihonkan・dayori

6月6日早朝、東北大学関係者を主とする訪問団がノボシビルスク・トルマチョーヴォ空港に降り立ちました。前日の夕方はひどい雷雨で道路には吹き飛ばされた並木の枝が散乱していましたが一行はシベリアの穏やかな朝日に迎え入れられました。今回の訪問は日本館の運営状況やシベリア支部と東北大学の学术交流関係を再認識し、発展に繋げるという目的で行われました。団員は東北大学の北村幸久事務局長、石崎忠夫経理部主計課長、文部科学省研究振興局の赤塚義英学術機関課課長補佐、そしてセンターからはセンター長に就任されてからは初めてのノボシビルスク訪問になる山田勝芳センター長、昨年の夏は駐在員として日本館の活動に従事された寺山恭輔助教の5名。

6日はロシア科学アカデミーシベリア支部本部や日本館の所在地である無機化学研究所の表敬訪問およびその他の業務を、7日には国立ノボシビルスク大学の訪問や“北海道・シベリア文化センター”の視察などをされました。本部訪問時、当初は9日開催予定のコプチュク前シベリア支部総裁生誕70周年記念式典の準備のため多忙につき会見の出席は不可能と言われていたドブレツォフ総裁も団員の顔ぶれに敬意を表し忙しい合間をぬって会見に出席されました。短期間ではありましたがとても意味のある訪問であったと思います。

ところで、ここロシアでは5年毎に研究所の評価が行われ、低い評価を受けたプロジェクトは中止されることもあるらしく、今回の代表団は日本館の活動評価のため

に組織、派遣されたものと解釈され、訪問団がノボシビルスクを発ったその日、様々な人から「日本館存続の確率」について質問されました。もはや日本館はセンターの連絡事務所というだけではなく、シベリア支部を訪れる他国の研究者にとっても気になる存在になっているようです。実際、日本館の話聞き、また日本館を見学して「自分たちもこの様な機関を組織したい」という研究者がポチポチ現れています。先日も韓国の研究グループが事務所運営に関し詳しい情報を入手すべく日本館を訪れました。ロシアで第1号となった学術機関の連絡事務所（日本館）開設ですが、前例がなかったため準備には大変な労力と時間を費やしました。しかし、現在は我々が敷いたレールがあります。もう、他の学術組織が連絡事務所を開設する事はそれほど難しくはないはず。近い将来には韓国館がアカデミータウンに誕生することでしょう。後は機能・運営面でも日本館が各国の見本となるよう前進あるのみです。

(徳田由佳子)



## 新任教官紹介 (下)

### 自己紹介

東アジア社会研究分野助教授 **上野 稔 弘**

本年4月付けで東北アジア研究センターに着任した上野と申します。私の研究分野は中国近現代史ですが、特に辺疆少数民族の政治的、社会的、文化的統合に関する問題に関心を持っております。

私はこれまでに北京の中央民族学院（現・中央民族大学）への二年間の留学や、その後の学術調査への参加を通じ、中国西南部の少数民族地区でフィールドワークを行ってきました。そしてこれらの調査を通じて収集した関連諸資料をもとに、中国の辺疆民族政策の変遷、民族政策の展開が引き起こした辺疆民族社会の変容、知識人の民族問題への関与といった点



中国の非漢族王朝・渤海国の遺跡にて

から、中国の国民国家建設過程における多民族社会統合の問題を歴史的側面から分析・研究してきました。

冷戦構造の崩壊とグローバル化の一層の進展に伴い、国民国家の在り方が問い直され、また民族の動静が国際社会に与える影響が大きくなってきています。東北アジア地域でも国家の枠組みを超えた経済交流や開発プロジェクトが展開されており、21世紀の日本がこうした動きに関わってゆく上で、この地域の多民族社会に対する歴史学的・社会学的視角からの理解がますます重要になって行くものと思われま。本センター着任にあたり、私としても歴史的アプローチからの研究を継続する一方で、東北アジア地域内の民族関係に注目し、フィールドワークを積極的に展開することで、研究に一層の幅と深みを加えてゆきたいと考えています。

### 東北アジアのヨーロッパ系住民

研究機関研究員 **伊賀上 菜 穂**

研究機関研究員の伊賀上と申します。2001年1月1日、新世紀の到来とともに2年の予定で本センターに着任しました。

専門はロシア民族学・史学および文化人類学です。

大阪大学在学中は、ヨーロッパロシア北部（モスクワより北の地方）の農村を対象にロシア人の結婚儀礼や民話研究を行い、ロシア人研究者や学生たちと一っしょに村の幼稚園や農家に泊まって調査をしてきました。

本センターでは主に19世紀以前の日露交流史研究に携わると同時に、対象をシベリアと極東地域に拡大して現代ロシア人農村社会に関する文化人類学的研究を進めます。シベリアで文化人類学と言えばアジア系少数民族が先に思い浮かびますが、16世紀に始まったロシア人のシベリア進出以降、様々な地域から様々な理由で東スラヴ人を中心とするヨーロッパ人が入植しています。19世紀の中露国境の変更、ロシア革命による移住の増加を経て、彼らの居住地は中国、モンゴルそして日本にも拡大しました。1991年のソ連崩壊以後、シベリ

ア・極東部はヨーロッパ地域以上の混乱を経験しています。そのような中でそれぞれ異なる背景を持った農村住民が自らのアイデンティティをどこに見出し、いかなる生活戦略を展開しようとしているのかを、ポスト社会主義時代の社会再編成と

いう視点から観察していきたいと思います。具体的には、ロシア人の中でも独特のグループとみなされているロシア正教古儀式派(分離派)やコサックの農村を調査し、東北アジアのヨーロッパ系住民の傾向と多様性を探究していく予定です。



ロシア連邦ヴォグダ州グリュザヴェツ地方博物館にて。後ろに置いてあるのは糸紡ぎに使う板。

## センター動向

### ■部局間協定

本センターと中華人民共和国広東省民族研究所との間で、両組織の緊密な協力と研究上の交流を推進するために、学術交流に関する協定を結びました。

### ■寄附研究部門

本年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

#### 【環境技術移転(NKK) 寄附研究部門】

- 渡邊 之 (ワタナベ、イタル) 教授：環境技術 (本年1月着任)
- 魁叶 (クエ、アシ) 助手：環境政策 (本年4月着任)

### ■現在の客員研究者

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員教授をご紹介します。

#### <客員教授>

#### 【国内から】

- 和田春樹 (ワタ、ハルキ) 教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹 (イツ、ヨシキ) 教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三 (ヨコヤマ、リュウソウ) 教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

#### 【海外から】

- 恩和巴図(インフバト)教授：中国、内蒙古大学蒙古語文研究所教授、ダグル語の口語および文献資料の言語学的研究
- ESENOVA, Tamara(エセノウ、タマラ)教授：ロシア、カルムイク国立大学ロシア語・一般言語学科長・教授、カルムイク語教科書入門編の出版計画
- Mikhail I. Epov(ミフ、ミカイル I.)教授、ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部地質・地球物理学連合研究所副所長、電磁気学的環境計測に関する研究

#### <客員研究員>

- 呼日勒巴特爾(フルバートル) 研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
- BORNOEVA, Darima Tsybikovna(ボロノウェ、ダリマ、ツイベコフナ)研究員：ロシア、国立ブリヤート大学分化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究
- LITASOV, Konstantin D.(コンスタンチン D. リタソフ)研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部地質学地球物理学鉱物学総合研究所研究員、マントル組成+水系の高温高压下での実験
- POPOVA, Liudmila(ポポヴァ、リュドミラ)研究員：ロシア、サンクトペテルブルグ大学経済学部講師、北東アジア地域の経済協力について

(北風 嵐)

## ● 広東省民族研究所の概要紹介 ●

広東省民族研究所所長 馬 建釗 (マー・チエンチャオ)

広東省民族研究所は、中国広東省の省都・広州市の中心部の東風中路に面した省政府の敷地内にあります。同研究所は、中国の民族事務委員会(民族政策、民族研究等を管轄する国務機関)に所属する研究所で、1960年に設立され、1996年には広東省宗教研究所が併設されました。現在の研究所専任職員は18名で、所内には民族、宗教、古籍(古文書)の3研究部門と、行政事務部門が設けられています。また、外郭団体としては1983年に設立された学術団体「広東民族研究学会」があり、その会員数は百名以上を数えます。研究所の設置目的は、民族、宗教に関する歴史文化および現代的諸問題の研究です。また同時に、民族や宗教に関する古文書資料等の収集、整理、出版をも、その任務としています。公刊している出版物としては、『広東民族研究叢書』があり、また

内部発行の刊行物として『広東民族研究通訊』があります。附属の図書室には、民族・宗教関連の図書約6万冊が所蔵されています。私は1993年以来、同研究所の所長を務めて参りました。東北大学東北アジア研究センターの瀬川昌久教授とは、1987年以降、密接な学術交流関係を持ち、中国南部の民族文化・社会に関する学術研究上の情報を継続的に交換してまいりましたが、このたび私が東北アジア研究センターの客員教授として招聘にあずかりましたのを機に、両研究機関の間の学術交流協定を締結し、今後より一層の学術協力の推進を図ることになりました。このことが、今後の中日両国の相互理解と、民族学・文化人類学研究のより一層の発展に寄与することを願ってやみません。

## 日ロ交流協会等主催【日ロ・シンポジウム】

### ならびに JCREES主催【市民学会】参加の記

6月22日からの3日間、日本と隣国ロシアとの関係を理解するに有益な、2件のシンポジウム等に出席しました。

立体的な視点からのしかも中身の濃い内容で、終始大変興味深いものでした。以下に概要を紹介します。

#### ◆日ロ・シンポジウム『日ロ歴史認識問題と出版交流』

【22日（金）午後、於 在日ロシア通商代表部（東京・高輪）；NPO 日ロ交流協会・ロシア国際科学文化協力センター・日ロ協会 の共催；国際交流基金の助成；東北大学東北アジア研究センター・外務省・在日ロシア連邦大使館・日ロ友好フォーラム21の後援】

昨年6月第1回に引き続き、同じテーマでの第2回シンポジウム。大道寺小三郎日ロ交流協会会長（本懇話会副会長）、ならびにパノーフ在日ロシア連邦大使のご挨拶の後、山内昌之東大教授から文学を通しての歴史認識についての基調講演があり、次いでジャーナリスト・学者・公使夫人などロシア人4名を含む7名のパネリストで活発な討論がなされた（写真1）。



写真1 白熱したパネル討論

ロシア駐在経験者のNHK解説委員植田樹氏による、日ロ間の戦争に対する日ロ各国人の認識の相違指摘など印象的であった。テーマには高次元の内容を含むだけに、今後も暫く同じテーマで毎年開催される模様。夕方懇親パーティーが開催され、後援代表として山田勝芳センター長（本懇話会理事長）が挨拶し、盛会の祝辞と今後の協力連携強化について述べた（写真2）。



写真2 パーティーで挨拶する山田センター長

#### ◆市民学会『日本とロシア—歴史・交流・共生』

【23日（土）・24日（日）、於 東京外国語大学（府中）；JCREES（日本ロシア東欧研究連絡協議会：日本でロシアを研究している6学会の連合組織、3年前に結成）の主催；読売新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社 の後援】

市民学会は、日本とロシアのきずなに関心を持つすべての市民が参加出来るように企画されたもので、今回の実行委員長は、ロシア史の権威で本センター客員教授の和田春樹東京大学名誉教授。

「歴史」と「交流」の2会場に分かれ、「歴史」では江戸・明治・大正・昭和期それぞれの日ロ関係、「交流」では文学・芸術・実務者の交流、日ロ経済協力の現状、交流団体・NGOの活動に関して、各々第一線の研究者・実務者から総数50件余りの報告と討論があった。本センターの寺山恭輔助教授は、1920年代の日ロ関係に関して、特に最近刊行されたロシアの史料集をもとに研究の展望を概説した。

また「共生」に関しては、第1日目に「私とロシア」というテーマで、オペラ歌手の川副千尋氏・元駐ロ大使の都甲岳洋氏などロシアにかかわりのあった6名での、第2日目に「北方4島とわれわれの未来」なるテーマで、和田春樹教授以下5名でのパネル討論会があり、白熱した質疑応答が続いた。

記念講演は、作家であり経済人である辻井喬（本名：堤清二）氏が「ロシアにおけるユートピアの問題」なるテーマで、氏のユニークな歴史観、人間観が披露された。

今回の学会の特徴は、ロシアに関わるあらゆる分野の第一線活躍者が一堂に会しての講演により、多面的な視点からのより客観的な理解を可能にしようとしたものであり、聴衆参加者も未曾有・予想外の多人数（数百人づつ入る2会場が満席）の大盛況であった。（岩山健三）



理事長も3代目に入りましたが、我が「うしとら」の方は10号という記念すべき巻数を出すことができました。ひとえに、本懇話会会員を始め、支えつけてきてくださった多くの関係者のご支援・ご鞭撻の賜物と心得ます。記念号とは致しませんでした。この欄を借り、あらためてお礼を申し上げさせていただきます。（成澤 勝）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第10号 2001年8月8日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付

PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp